教職定着支援の試み
―リカレント教育を見据えて―

益　田　亮　英

VISIO No.45

九州ルーテル学院大学
Kyushu Lutheran College

December　2015

教職定着支援の試み
－リカレント教育を見据えて－

益　田　亮　英

An Examination of Ways to Support New Teachers for Improved Teacher Retention through Recurrent Education

Ryoei Masuda

1　はじめに

小学校教員養成に特化した児童教育コースの第一回生が卒業するようになって、急激に教職への就業者が増加した。従来は10名前後の教職だったものが、2014年度卒業生からは、正職及び臨採等を含めて40名と４倍増となった。本学の教員養成については、１年次から特徴的な取組みを展開している。教職についての理解と実践力の育成を図ったカリキュラムで、現場適応力を身に付けるよう指導している。しかしながら赴任を直前にして卒業生は様々な不安を示した。そこで2014年度末に卒業前アンケートを取り、不安解消に向けた赴任前研修を行った。また赴任直後には、同窓生の情報を「教職通信」で配信し、各自がそれぞれの職場で頑張っていることを知らせ、大変なのは自分だけではないと安心感を与えるよう努めた。記事には、多くの情報を取り入れ、内容は明るくコミカルに軽い気持ちになるように心配りをした。赴任前研修や「教職通信」は一つの定着支援ととらえているが、このことを契機にして現場と大学を往還しながら教師としてのスキルアップにつなげるリカレント教育の在り方やその方向性が見いだせないか検討を加えたいところである。

2　本学の教職課程の特徴と2014年度卒業生の進路

(1)　教職課程の特徴

本学の教職教育の特徴は、教職希望者全員１年次に「教師力演習」の受講を義務付けていることである[1]。この科目は、教職課程の事前指導として、教師として必要な資質について考え、教職課程の学修の中で何を学べばよいか、どのような学生生活を送ればよいかなどを考えさせるものとなっている。当初は、小学校免許希望者のみを対象として、学校の第一線で活躍している先輩教師や管理職の講話を取り入れ、学生自身が自身の適性や進路について考え自己判断の機会を与えたものである。更に、２年次以降の教職履修条件としてＧＰＡなどを取り入れ学修意欲の喚起

に努めた。小学校免許希望者の学修意欲・態度や姿勢が、各種体験活動や教育実習における実習校からの評価や、ＧＰＡなどあらゆる面で好結果を示した。免許の種類によって履修条件も変えているが、現在は、教職履修希望者全員に履修を義務付けることになった。「教師力演習」はスタート時には、教育課程上の科目ではなく、科目外科目として実施し、単位や成績の認定は行わなかったが、現在は、１年後期から正式な科目として、単位や成績を認定することになっている。また、小学校免許希望者については２年次、３年次に各１週間、８月末から９月中旬にかけて、児童教育演習として、主に出身小学校において観察実習を実施している[2]。観察実習で学校現場の様子が理解できたところで、教育実習を体験するようになっている。なお、2014年度入学生からは「児童教育フィールドワーク」として長期にわたる現場体験も実施する予定である。

(2)　2014年度卒業生の進路状況

小学校教員免許取得が認可されたのが2010年になってからであり、受験生への周知が十分でないまま入試が実施されたため、2010年度入学生の小学校教員免許希望者は比較的少なかった。「教師力演習」の受講生は４月当初は、30名程度だったものが学修する中で、自己判断やＧＰＡなどの結果から20名まで減少した。2009年度までの入学生で教員免許を希望する者は、中・高英語又は、高校公民を基礎免とした特別支援学校教員希望者に限られ、毎年20名程度であった。その中で教職を希望する者は10名前後で、特別支援学校希望者がほとんどであった。しかし、小学校教員免許が取得できるようになった学年から教職履修希望者が増えた。特に、小学校教員免許取得に特化した児童教育コースが開設されてからは急増した。最近３年間の教職関係卒業生の進路状況と教職履修者の教職就業の割合は表１のようになり、免許取得状況は表２のとおりである。いずれも幼稚園教諭免許については含まれていない。

表１　教職履修者及び就職先

卒業年度	教職履修者及び就業者（人）（就業率は、大学院、保育関係を除く）		就職先（人）					
			教職			その他		
	免許取得者	教職就業者数（%）	小学校	中高校	特支	大学院等	保育	企業
2012	17	11（68.8）		4	7	1	0	5
2013	22	10（58.8）	4	0	6	4	1	7
2014	50	40（85.1）	22	5	13	2	1	7

表2　免許別取得者数

卒業年度	免許別取得者数（人）			
	小学校	中・高英	高公民	特支
2012		6	11	11
2013	17	6	2	16
2014	39	17	4	27

３　2014年度卒業生の勤務の実態

2014年度卒業生のうち教職には40名が就いた、そのうちアンケートに回答した36名の勤務の実態は、以下のようになっている。

(1)　勤務校種

小学校（20）名、中学校（２）名、高等学校（３）名、特別支援学校（11）名で小学校と特別支援学校が多い。

(2)　身分

正職員（６）名、臨採（26）名、非常勤（４）名で臨採・非常勤が83％を占める。

(3)　校務の内容

通常学級担任（15）名、通常学級ＴＴ（１）名、特別支援学級担任・副担任（４）名、特別支援学校担任・副担任（10）名、その他（６）名となっている。校務分掌では、環境部職員作業計画、国際理解、食育担当などの部署が多かったが、体育、音楽、生活科などの主任を担当している者もいた。

(4)　教職への満足度

教職に就いてよかったと思っているかについては、Ａ：とても良かった（24）名、Ｂ：どちらかといえばよかった（12）名と答えている。（表３）回答した卒業生の全員が、教職に就いたことをＡかＢと答え、肯定的にとらえている。日常の生活の中で、厳しさや困難など教職の大変さはあるものの、子どもの成長を感じたり、子どもや保護者との信頼関係が確認されたとき、あるいは与えられたプロジェクトを達成したときなど充実感、満足感を覚え教師になってよかったと感じている。しかし、表にはないが、正規採用の回答者６名のうち４名が、Ｂと答えていることは気掛かりである。

表３　教師になってよかったか

項目	（人）
Ａ：とても良かった	24
Ｂ：どちらかと言えばよかった	12
Ｃ：どちらかと言えばいいえ	0
Ｄ：いいえ	0

自由記述欄から

「予想していた通り毎日大変なことばかりで、体力的にも精神的にもきついと思う。しかし、その反面、これまで知らなかった何か新しいことを学ぶ機会であふれており、充実した生活が送れているので教師になってよかったと思う。教師を続けていく限り自分も成長し続けていることができると確信している。（Ａ）」

「実際の子どもたちに出会うと、大変なことも多いですが、喜びの方が大きいです。『先生』と呼ばれる毎に、責任感も伴いますが、子どものために頑張ろうと思える原動力にもなります。また、ベテランの先生方もいらっしゃるので、たくさんアドバイスをいただきながら、安心して仕事をすることができます。他にも研修、出張などで、常に知識を深めることができるのも教員な

らではだと思います。（A）」

「自分自身の未熟さを知ることができた。教師というものの仕事や大変さ、実習では感じることのできない責任など多くのことを痛感しました。こんなに未熟のままで教師になって、周りに迷惑をかけてしまっているからとても良かったとは言えません。（B）」

「子どもたちも可愛いですし、先生方もすごく良くて環境はとてもいいです。事務処理が遅く、なんでも時間がかかる自分にイライラしてしまいます。精神的な弱さを鍛える時期でもあるので、乗り越えるべき壁なのかなとは思いますが、教師に向いているのか疑問に思うこともあります。（B）」

(5)　教職に就いてこれまでに困ったことがあったか

この問いには、ほぼ全員があったと答えた。具体的な内容は、教科指導、生徒指導、学級経営が多く、保護者との関係や、校務分掌の悩みなどと続く（表４）。

表４　これまでに困ったこと（複数回答）　（人）

教科指導	23	同僚との関係	9
生徒指導	18	校務分掌	11
人権教育	5	部活動指導	4
保護者との関係	11	その他	1
学級経営	13	ない	1

(6)　困ったとき誰に相談したか

困ったときの相談相手では同僚が最も多いが、校長、教頭、学年主任などの上司にも相談しており、報・連・相が実施されていることがうかがえる。その他には、大学の教員や養護教諭などがあった（表５）。

表５　困ったときの相談相手（複数回答）　（人）

校長	8	学年主任	14
教頭	18	初任研担当者	7
同僚	33	その他	10

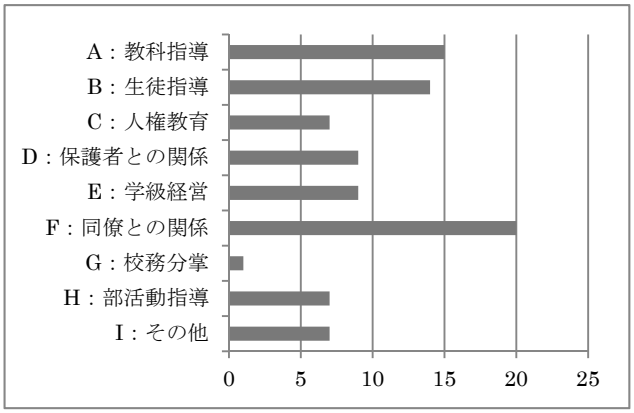
(7)　仕事上の楽しみは

学校における楽しみは同僚との関係が最も多く、教科指導や、生徒指導と続く。その他では、子どもと一緒になって遊ぶことなどの子どもとの関わりや、研修などがあげられた。部活動指導では、子どもの頑張りで、九州大会に進むことができ、県外遠征の経験を挙げている者もいた（表６とグラフ）。

表６　仕事上に楽しみ

Ａ：教科指導	15
Ｂ：生徒指導	14
Ｃ：人権教育	7
Ｄ：保護者との関係	9
Ｅ：学級経営	9
Ｆ：同僚との関係	20
Ｇ：校務分掌	1
Ｈ：部活動指導	7
Ｉ：その他	7

表６のグラフ



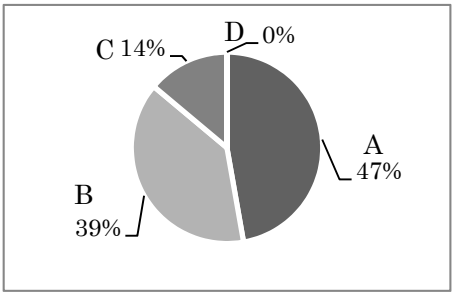
(8)　休日には休むことができたか

休日には、ほとんどが休むことができたと答えている。Ｃ：どちらかと言えばいいえと答えた中には、部活動顧問がいる。

表７　休日に休めたか　（うち数は臨採の数）

項　目	（人）
Ａ：はい	17（12）
Ｂ：どちらかと言えばはい	14（12）
Ｃ：どちらかと言えばいいえ	5（2）
Ｄ：いいえ	0

表７のグラフ



(9)　臨採・非常勤の実態

回答者の内26名が臨採、４名が非常勤である。臨採について主な校務を尋ねたところ、通常学級、特別支援学級、特別支援学校で26名のうち22名が担任・副担任をしている（表８とグラフ）。担任・副担任が全体の85％を占めており、臨採１年目から担任要員として活躍していることが分かる。「毎日座る暇もなく授業をしています。毎日、毎日、どうしたらいいだろうと悩みながら頑張っています。普段考えないようなことに頭を悩まされ、トイレで泣いた日もありました、この経験は絶対に役立つと信じて頑張っています。（特別支援学級副担任）」初めての業務に戸惑いながらも前向きに取り組んでいる様子が分かる。また、「同じ学年部の先生方に支えて頂きながらどうにか職務を全うすることができています。困ったらすぐに相談し、早めの解決に心掛けています。（小学校担任）」周りの先生方の支えにも感謝の気持ちがうかがえる。教員採用試験の合格を目指しての臨採であるが、臨採や非常勤として勤務しながら試験勉強ができたという者は非常に少なく、勉強する時間がなかったと答えている（表９、10）。教員を続けるかという問いに対しては、ＡとＢと答えた９割が継続を希望している。Ｃ、Ｄと答えた理由は尋ねていないが、塾に通って採用試験勉強に専念したいと思っている者もいた。（表11とグラフ）。臨採１年目は採用試験

に取り組む余裕がないのが実情ということが分かる。日祝日は休むことができたかという問いには、休めたと答えたものがほとんどであり休日は確保できている（表７）。クラブ活動の顧問を担当している者がどちらかと言えばないと答えている。また、部活動の顧問では、県外引率の経験ができ高い満足感を持っている者もいる。初任者には研修計画が組まれ、全体あるいは地域ごとの研修が行われ、初任者間の交流も保たれているが、臨採の研修の実態についても尋ねた。若手の臨採を対象にした研修が計画され全員が１回から２．３回受講したと答えている。研修の内容についても、教職の特殊性や心構え、生徒指導、教科指導などが多い、しかし、アンケートの回答からは、同じ立場で頑張っている人との情報交換ができたり、交流したことが楽しかったと答えている。

表８　臨採の主な校務（該当者26名）

項　目	（人） 内数は副担
通常学級担任	10
特別支援学級担任	４（１）
特別支援学校担任	８（４）
教科TT	1
特別支援学級指導補助	1
生徒支援	1
寄宿舎指導員	1

表８のグラフ

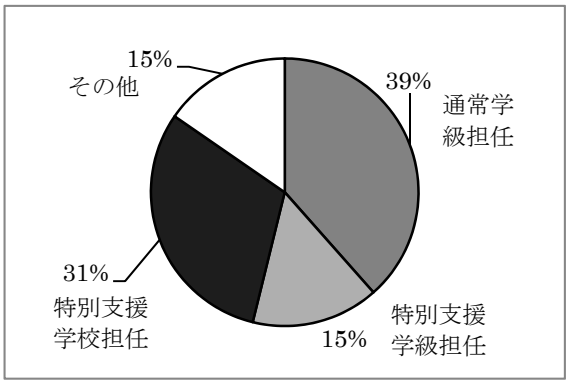


表９　採用試験勉強ができたか（該当者30名）

項　目	（人）
Ａ：出来た	2
Ｂ：どちらかと言えばできた	2
Ｃ：どちらかと言えばできなかった	14
Ｄ：出来なかった	12

表９のグラフ

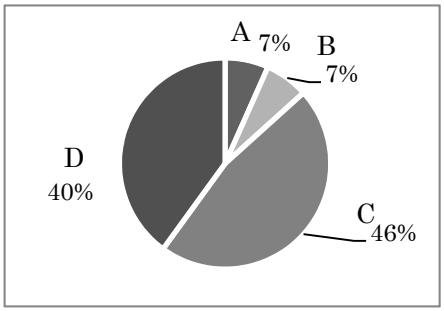


表10　採用試験勉強の時間はあったか（該当者30名）

項　目	（人）
Ａ：あった	3
Ｂ：どちらかと言えばあった	7
Ｃ：どちらかと言えばなかった	13
Ｄ：なかった	6

無回答１

表10のグラフ

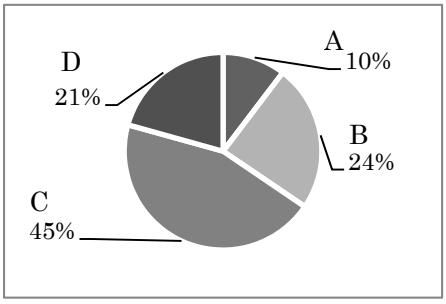
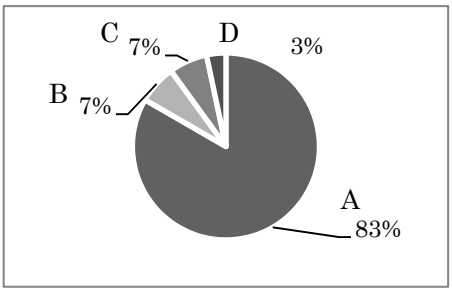


表11　教職を続けたいか　（該当者30名）

項　目	（人）
Ａ：はい	25
Ｂ：どちらかと言えばはい	2
Ｃ：どちらかと言えばいいえ	2
Ｄ：いいえ	1

表11のグラフ



４　赴任前研修

従来、特別支援学校教員希望が大半で例年10名前後が主に臨採として教職についていた。2011年卒業生から現役での合格者が継続的に出るようになった。教職は一般の職場と違って、見習い期間がないこと、４月１日からいきなり一人前として、児童生徒の前は勿論保護者の前に立たされるという特別の職場である。数日前までは、学ぶ側だったものがいきなり先生としての全てを求められるのであるから、大変な飛躍が必要である。大学という温室からいきなり世間の荒波に漕ぎ出すことになるので大きな不安があるはずである。これまで本学では、赴任前指導は教職に就くものが少なかったこともあって個々に行っていたものの組織的には実施していなかった。過去には10倍近い難関を突破して採用されたにもかかわらず、２学期を待たずに退職に至ったケースもあった。生徒指導、教科指導、部活動指導、職員間の人間関係など様々な要因があるが、結局は学校文化になじめなかったことが理由として挙げられる。せっかく掴んだ夢を簡単に手放さない、あきらめない、辞めない手立てを施す必要性を感じた。更に、2014年度卒業生から大量に教職就職が増えたことから、卒業前に、不安を少しでも解消することを目的に赴任前研修を計画した。まず、卒業生に今現在どのような不安を抱えているかアンケートを取った。その後、最近採用された、卒業生を招いて疑問に答える形で体験談を語ってもらうこととした。その後は、さらに校種別に分かれ分科会形式でさまざまな疑問に答えてもらった。卒業生の進路に合わせて、中学校、小学校（熊本県関係、熊本市関係それぞれ１名）、特別支援学校から出席してもらった。（写真１）

(1)　卒業前の不安（卒業生のアンケートから）

中・高英語、小学校、特別支援学校と希望校種ごとにまとめたものが次の表12のとおりである。Ａ，Ｂ，Ｃの人間関係に関する者が圧倒的で、次に授業展開についてなどがあげられた。また、具体的な不安として多かったものは、分かり易い授業ができるか、保護者への対応（保護者会、家庭訪問など）、学級経営（クラスつくり）、子どもとの人間関係などがあった。

表12　卒業前に抱いている不安　　（回答者37名）

	質　　問	中・高英語	小学校	特別支援	合計
(A)	児童・生徒の気持ちを理解し上手にコミュニケーションができるか	0	10	3	13
(B)	保護者と良い関係を築くことが出来るか	2	21	7	30
(C)	同僚の先生方とうまくやっていけるか	2	13	5	20
(D)	授業がうまく出来るか	4	21	7	32
(E)	その他（自分の時間、クラブ活動など）	3	8	3	14

(2)　赴任前研修の効果（卒業後のアンケートから）

卒業生を対象にして赴任前の研修がどのように役立ったと思っているか尋ねたところ以下のような回答があった。

アンケート結果（40名中36名回答）

１）赴任前研修は不安解消に役立ったか

項　目	（人）
Ａ：はい	12
Ｂ：どちらかと言えばはい	18
Ｃ：どちらかと言えばいいえ	4
Ｄ：いいえ	0

（回答なし２）

【写真１：赴任前研修】

２）どのような点に役立ったか

・体験談で学校へ持っていくものや、服装などの具体的なイメージができた。
・先輩たちがどんな生活を送ったか、社会人のスタートを切る前に知ることができ安心した。
・困ったり、きつくなったりしたら、いろんな先生に相談することがとても大切だということが分かった。
・まだ、勤務先も決まっておらず不安だったし、具体的に想像するのは難しかったが、先輩方の話を聞き仕事への意欲がわいた。
・不安しかなかったので、先輩も同じような思いを持っていて、それでもしっかり教師としての仕事を楽しんでいることが分かって安心した。

３）今後もこのような機会があったがよいか

項　目	（人）
Ａ：はい	27
Ｂ：どちらかと言えばはい	5
Ｃ：どちらかと言えばいいえ	2
Ｄ：いいえ	0

赴任前研修については、肯定的に感じているものがほとんどであった。どちらかと言えばいいえと答えた者の理由は、もっとリアルな体験談を多く聞きたかったというものであった。なお、回答がなかった２名は当日の欠席者である。みんなの悩みが同じとわかり不安を共有できた。現場の先生の話でイメージがわいた。今後もこのような機会があった方がよいと多数が答えている。要望としては、もっと時間をかけてゆっくりと話したいとか、臨採の人の話も聞きたかったという声もあった。しかしながら、教員の赴任先が決定するのは、３月下旬から４月初めになっている。２月末のこの段階では、赴任先よりもまず、教師としての職があるのかどうかも分からないという不安も強くあるようである。

５　「教職通信」

教職スタート当初のつまずきを少しでも減らしたいという思いで、「教職通信」を発行した、Ａ４一枚に赴任先、担任、校務分掌、新しい住居など卒業生の様々な近況を報告した（写真２）。不定期発行としたが、生活が落ち着くまでは間隔を空けず配信することにした。４月２日発行の第１号から９月１日発行まで17号を数えた。配信の方法は、大学時代に教職の連絡で利用していたＬＩＮＥを活用した。Ａ４一枚にまとまったものを写真データとして、卒業生の一人に送りそれをＬＩＮＥで流してもらった。しかしこのＬＩＮＥは小学校免許取得者中心のものであったために中・高免許取得者には配信されていなかった。「教職通信」を読んだことがないと答えたものは中・高の免許取得者である。「教職通信」への反応も尋ねた。結果は以下のとおりである。

(1)　教職通信を読んだことがあるか

項　目	（人）
Ａ：毎号読む	23
Ｂ：時々読む	4
Ｃ：めったに読まない	1
Ｄ：読んだことがない	8

【写真２：教職通信】

(2)　感想

感想欄は自由記述としたが、友達の様子が知れ、頑張ろうと元気をもらったが最も多かった。大学に守られていると感じたと答えたのもあった。

以下自由記述欄から

「毎号楽しく読んでいます。地元を離れてなかなか情報交換する時間が取れないので、みんなの元気な様子が伝わってきて励みになります。」

「周りの友人の様子が分かり、毎号わくわくしながら読ませてもらっています。また、友人の頑張っている様子を見て『自分も頑張ろう』という気持ちになります。」

「みんなの様子が分かってとても励みになります。“共にがんばる仲間”のありがたみを感じま

した。」

(3)　「教職通信」は役立ったか

教職通信は読んだ者は全員役立った、どちらかと言えば役に立ったと答えた。理由は、感想欄とダブるところが多く、「他人の様子を知り自分も頑張ろうと思った。」「同じ悩みを抱えている人がいて安心した。」「読むとリフレッシュできる。」など、同級生の様子を知ることで安心する。という趣旨の答えが多かった。また、「負けてはいられないと思った。」や「意識の向上につながった。」など自己啓発になったと答えた者も多かった。

以上のことから、「教職通信」については、教職定着に向けた初期の支援という目的は達していると判断できる。大学を卒業した者に対する支援として過保護すぎないかとの懸念も抱かないわけではないが、４月１日から一人前の教師としていきなり最前線に立たされるという教職の特殊性を考慮するとできるだけ手厚い支援が必要である。

６　今後の在り方、リカレント教育に向けて

なるべくハードルを低くした上で、リカレント教育をスタートさせたい。そのためにとりあえずは、大学に集うことを提案し、様々な会話を進める中で、共通のテーマについて学習したいという雰囲気に結び付けたいと思いいくつかの質問をした。

(1)　大学を会場にして、卒業生が集まり、意見交換や悩みを語り合うような機会（サロン）を作るとしたらどう思いますか。

表13　サロンに賛成か（回答36名）

項　目	（人）
A:賛成	18
B:どちらかと言えば賛成	16
C:どちらかと言えば反対	2
D:反対	0

表14　サロンの内容（複数回答有）

項　目	（人）
A:語り合うだけ	24
B:先輩講話	6
C:テーマを決めた研修	11
D:その他	0

表15　時期　（複数回答有）

項　目	（人）
A:平日夜間	1
B:土曜の夜間	11
C:土日の昼間	3
D:長期休暇中	27

表16　頻度（複数回答有）

項　目	（人）
A:月1回	2
B:2～3月に1回	13
C:半年に1回	18
D:年に1回	7

表17　出席するか

項　目	（人）
A：出席する	16
B：どちらかと出席する	19
C：どちらかと言えば出席しない	1
D：出席しない	0

(2)　卒業生を対象にした教育実践論文コンクールについてどう思いますか

表18　論文コンクールについて

項　目	（人）
A:賛成	3
B:どちらかと言えば賛成	23
C:どちらかと言えば反対	7
D:反対	1

（回答なし２）

表19　論文に応募するか

項　目	（人）
A:応募する	1
B:どちらかと言えば応募する	12
C:どちらかと言えば応募しない	15
D:応募しない	7

（回答なし１）

卒業生が集うサロンみたいな機会を持つことについては、ほぼ賛成である。また長期休暇中に半年に１回ぐらいの頻度で開くことを希望し、内容は、語り合うだけでよいという者が多い。ほぼ全員が出席すると答えている。また、実践論文コンクールについては、多少反対はあるものの大方賛成であるが、自分が応募するかということについては否定的な意見が多い。応募しない理由では今は忙しくて、研究論文など考えられないという答えがあった。

7　おわりに

これまでにも何度か述べてきたが、教師という職業はいきなり最前線での活躍が求められるという点で他の職業と大きな違いがある。学校の流れも理解できないままに、与えられた校務を処理しなければならない。価値観の多様化に伴って様々な要求を求める子どもや保護者にも対応しなければならない。初期対応のまずさが大きな問題に発展することも考えられ、初心者には大きなプレッシャーとなっている。条件付き採用期間に依願退職する数が近年300前後あるとも言われているが、現実には、正式採用を目指して、臨採や非常勤講師として初任研対象者の数倍の若者が教育現場に身を置いていると推察できる。臨採や非常勤の若者の１年以内の進路変更も多いと思われるが数値に見ることはできない。しかし、これらの若者が教育現場の大きな力になっていることは間違いない。４年間教職課程を履修し、目指す職業に一歩近づいたところで諦めてもらいたくない、そのような思いで定着支援を試みた。今回報告した赴任前研修や「教職通信」は、初任者研修が届かない若者を含めた教職就業者への定着支援としての一つの試みであるが、一人でも多くの支援につながれば光栄である。本学でも保育士、幼稚園教諭については、数年前からリカレント教育を実施し軌道に乗っている。教職についてはこれからであるが、アンケートの中

に、「土日に、先生方が大学にいる日を教えてください。それに合わせて話に行きます。」とあった。リカレント教育へのファーストステージとして、大学を集いの場として開放することなどを今後検討したい。

注

1　益田亮英　「教職科目履修前指導の試みー“教師力演習”を事例としてー」『九州ルーテル学院大学ＶＩＳＩＯ』第41号、2011年、pp9-20

2　益田亮英　「小学校現場体験“児童教育演習”の成果と課題」『九州ルーテル学院大学ＶＩＳＩＯ』第43号、2013年、pp33-43